

第50回 中高校生の吃音のつどい(演劇レッスン)

11月14日(日)、小学生7人、中学生4人、高校生2人、ご両親10人、スタッフ33人の計56名が参加。千代田区立千代田小学校ことばの教室にて開催。午前は演劇、午後はグループ別の話し合い。まず午前の演劇「木竜うるし 木下順二作」は最初にスタッフがデモをやって、その後、参加者にも演劇をやっていただきました。デモの時点では、僕達スタッフもだいぶうまくなったなあと勝手に自画自賛していましたが、その後の参加者の演劇を見て驚きました。参加者の方がスタッフよりうまかったからです。小学生や中学生は完全に権八と藤六になりきり、感情のこもった演技をしていました。自分の演技力の無さにがっかりしました。でも、もし小林さんがおっしゃった、スタッフの演技を見た子供達が、どもってもいいんだと思った結果、あのような演技ができたのならば、最高に嬉しいです。やはりこのつどいは、どもりまくった方がプラスになるということが分かりました。(リーダー:桜井達也、菊地由莉、松本直大)

Y.H (小2女子)

えんげきでは、ごんぱちととうろくをやって、とてもたのしかったです。さいしよは、しっぱいするかと思ったけれどせいこうしてとてもうれしかったです。おはなしあいでは、女の子チーム男の子チームにわかれてやってたのしかったです。また中高校生のつどいに行きたいと思いました。

H.Y (小5男子)

特に「劇」がおもしろかったです。人前で食べることは全然悪くないということが、改めてわかりました。
多分スタッフの方々も、それを参加者の人達にわかってもらうために行ったのだと思います。

午後の話し合いでも、立方体を使って今の吃音の状態を確認できました。立方体の数が多ければ多いほど意識しているということなのですが、案外小さくなりました。

学校で「美しい日本語の話し方教室」(劇団四季主催)というのがあったのですが、なんとなく吃音を否定されたような気がしました。僕が話す言葉は美しい日本語ではないのかな?とも思って、とてもいやな気持ちになりました。人に伝わるように話すのは大事だけれど、一人一人話しやすい話し方で話すのがもっとも大切なことだと思います。

そういうことを話していると、色々な方が熱心に聞いてくれたのでとても良かったです。今回はこの集いに参加できたことを、とても嬉しく思っています。本当にありがとうございました。

R.T (小6男子)

僕はこの、吃音のつどいに参加して、同じ吃音なのに明るい人が、たくさんいてびっくりしました。次回のつどいにまた、参加してもっとみんなと仲良くしたいです。

M.H(小2女子のお母さん)

初めての参加でしたが集いのイメージはなんとなくついていました。会場に着くとすぐにスタッフが話しかけてきてくださってとても好印象でした。

午前中の劇は、娘はやる気満々で、楽しく意欲的に取り組めていました。自宅に帰ってからも自分があたった部分の台本を読み返して想い出に浸っていました。

午後の話し合いは、自分の番がきて話し始めると本当に不覚にも涙がでてしました。普段涙も、ろくに出ない自分から涙がこぼれてしまったことにとっても驚きました。毎日毎日なんだか頑張り過ぎていたのだと思います。劇の初めに江原さんが「今日は思いっきりどもってください」と言ったこと、話し合いの初めにも佐藤さんが「どもっている人をむしろ正面から見てください。目をそむけないでよく見て話を聞いてください」と言ったことにとっても感銘を受け「受け入れられること」という実感が湧きました。娘のどもりについて受容しているつもりではいたけれど、娘のどもりには波があり全くどもらずに話すこともあるので、周囲の人に「今日は調子がいいね」とか「Yちゃん最近どもらなくなったね」とか言われ

るとどうしても「どもらない Y がオッケー Y」で「どもる Y はダメ Y」みたいな刷り込みのようなことが自分の中で起こっていたのだと思います。それを今日の会の初めに「思いっきりどもってください」とか「どもっている自分達を見てください」と言われものすごくほっとしたのだと思います。

涙が出たのは、娘のどもりのことを声に出してしゃべったこと。そして、完全に受け入れていただける方々の前だったことによるものだと思います。どもり始めたのは、4 歳くらいの時。保育園の先生に「どもっていると小学校あがってから苦労することも多いから今から直しておいた方がいいですよ。去年卒園した〇〇くんもどもっていたけれどさくらポートに通って言語療法士さんの訓練受けたら治りましたよ。Yちゃんも行ってみますか？」と言われ通い始めました。その保育士さんはとても親身になってくださる方で、信頼していたけれど、その言葉に実は私はとても傷つけられたのだと思います。言語療法士さんの所へ通って、まずどもりの原因について話し合いました。私が「下の子が生まれて娘への愛情が半減してしまったのが娘へのストレスとなってももっているのでしょうか？」と言語療法士さんへ言いました。言語療法士さんは私の意見を否定せずに話を聞いていたので私の中で「やっぱり愛情不足なのかな。私はフルタイムで仕事もしているしもっと頑張らない」という思いが強くなりました。保育士さんにも同じようにどもりの原因について相談しました。保育士さんも私の意見を否定せずに「Yちゃんは感じやすい子だから、もっともとお母さんが大好きだよ！って言葉に出して伝えてあげてください」と言われました。私は更にもっともっと頑張らないと！と思いました。

まとまらない文章になってしまいました。手直ししたりしているとまた時間がかかって送るのが遅くなりそうなので、このまま送ります。また集いに是非参加させてください。私のガス抜きの時間になります。これからどうぞよろしくお願いいたします。

I.S(小 3 女子のお母さん)

初めて娘と参加しましたが、娘は私の心配をよそに、すぐにお友達を作り、すっかり馴染んでいて驚きました。親の私の方が緊張して、少し緩むと涙

が止まらないという情けなさでした。スタッフの方達のような年代で、どもりのある方にお会いした事がなかったので、正直なところ驚きました。目をそらしたりして失礼な事もしてしまいました。すいませんでした。

娘は、自分 1 人ではないということに気付き、本当に楽しかったようで、また参加したいと言っております。私も、他のお母さん方の話を伺って、とても励みになりました。

H.Hさん(中 3 男子のお母さん)

ショート劇ということで、息子は不安な気持ちでしたようです。スタッフの方々の模範演技の鑑賞の後、参加の子供達の出番となりました。私も不安でしたが、みんな元気に大きな声でせりふを語っていました。…できるだけ、つかえないように、言わなくては…という毎日の緊張から解放されている様子でした。こんなに心穏やかな気持ちで人前に出ることは今までに無かったように思います。

午後の話し合いでは、何年も心の中にしまっておいた親としての心配や不安な気持ちを、全部聞いていただいて、肩の力がフツと抜けたように思います。また、スタッフの皆さんや参加者の皆さんにお会いできて心のよりどころができました。これからも親子で乗り越えて行かなければならないことが多々あると思いますが、全て柔軟に受け止めて行けそうです。

国立リハビリテーション学院学生

初めて参加する緊張感と、皆さんにどのように受け入れてもらえるか不安がありました。しかし、準備の段階から皆さんにとっても暖かく迎えてくださり、緊張感や不安感は次第に和らいでいきました。

演劇練習前の体揺らしでは、力を抜いてもらった状態で相手の体を揺らすことが難しかったのですが、力が入った時にきっちりと伝えることで、外から見た体の状態と、自分の中で感じる体の感覚とを比較して捉える事ができ、主観的、客観的に自分の体の状態を感じることができるのは、良いことだと思いました。

その後の演劇の「木竜うるし」では、少しの練習時間にもかかわらず各場面とも、アレンジを加え、

皆さん生き生きとして演技している姿がとても印象的でした。私自身、人の前に出ることは苦手なので、恥ずかしそうにしながらも舞台上に立ち素晴らしく演技している皆さんに力強さを感じました。

午後の小学生の高学年グループの話し合いでは積木ブロックを使いウェンデル・ジョンソンの言語関係図(立体図)を作ってもらいながら、吃音に対して過去や今現在感じている事について話を聞く事ができました。高学年の男の子達は、小学校1年生の頃、ことばをつつかえる事が多く、友達に真似される事があったため、非常に嫌な思いをしていた事を教えてくれました。それを表すように立方体の形、体積共に大きなものでした。しかし、今現在はブロック1つか2つぐらいだと言っていて、それはなぜかと尋ねたところ、集いに参加したことで吃音についての捉え方が変り、友達も目立って真似することがなくなったため、気にせずに捉えられるようになったと教えてくれました。また、話し合いでとても印象に残っているのが、ある男の子の話でした。それは、学校で観た演劇鑑賞の中で「美しい日本語」について触れられている場面があり、その場面を見て、「僕の話すことばは美しくない日本語なのかと嫌な思いになってしまった」と教えてくれました。その後、「話し方ではなく、話す内容の方が大切だと僕は思う」と言っていて、コミュニケーションとは何か、人に気持ちを伝えるとはどういう事なのかという事を深く考えさせられました。



私自身、最近身近な友人に吃音であることを打ち明けられました。ほとんど症状が出ないため、全く気付かなかったのですが、中々言えずに苦しんでいた友人の気持ちを知り、何もできなかった自分がとても嫌になりました。そうした思いをスタッフの方と話したところ、「吃音の事を伝えたいと思える人が身近にいてくれるだけで、良かったと思います」と言われ、少し気持ちが楽になりました。吃音に限らず、その他多くの事を話す事ができ充実した一日を過ごす事ができました。

桜井 達也 (スタッフ)

高校生グループは参加者2人と少なかったのですが、それでも、どもることについてしっかり話し合

えたと思います。最初に学習・どもりカルタ(日本吃音臨床研究会)で遊びました。その後、それぞれの持ち札の中から、気になった内容のカードを1枚選び、それについて思うことを述べてもらいました。どもりカルタは吃音を前向きに考えられるもので、とてもいいと思いました。Y君の話を聞きながら、自分の高校時代を思い出しました。僕もあの時は吃音を治すことばかり考えていました。どもらずに話す工夫もいろいろ考えてやりました。親に相談せず、自分で言語訓練をやっている病院を探したりもしました。あの頃、吃音は恥ずかしいもの、絶対に知られてはいけないうものだと思っていました。高校を卒業してまだ1年も経っていませんが、吃音に対する考えは大きく変わりました。もう僕は吃音を治さなければいけないという呪縛から解放されました。今は治ったらいいなという感じです。これも言友会や中高校生のつどいの人達のおかげです。話し合いの中で僕は「吃音は自分で治していくものだと思う」と言いました。こんなことを言ったら、言語聴覚士の方々に大変失礼ですが、言語訓練で吃音を根元から治すことはまず不可能だと思います。結局は自ら吃音という壁に何度もぶち当たって、壁を乗り越えるしか方法はないと思います。その壁を乗り越えた時、たとえ、どもりが完全に消えなくても、どもりを気にすることはなくなると思います。最後に、このつどいは僕にとって、一番の憩いの場です。一人一言の時、「ああ、また明日から厳しい現実に戻るのか」と憂鬱な気持ちになりました。これからもつどいスタッフを続けたいと思うので、よろしくお願いします。

印象に残ったカルタは、「大人になった どもる人 いろんな仕事についている」。高校時代まで、どもりを持った大人は皆、暗い世界でひっそりと生きているものだと思ってました。アナウンサーの小倉智昭さんや総理大臣だった田中角栄氏も吃音だと知って、どもりであっても、花を咲かせることができるのだと励まされました。

小林 康文 (竹内レッスン経験者)

劇は、子供達の方が良かったという声があったようですが自分もそう思いました。ただこれはスタッフの姿を見た子供達が、どもってもいいんだと思っ

た結果だったのでは、とも思いました。たしかに元気が無かったけれど、どもりを隠したりごまかしたりしないスタッフの姿に好感を覚えました。それにひきかえ、自分はどもらないようにとつい思ってしまい、思ったようにどもれなかった不全感みたいなものを自分は今感じています。

話し合いでは、自分のことばかり話して親御さんのフォローになっていたのか心配です。ですが、自分の(新潟県内の)小学校の頃のことばの教室のこと、家ではまるでタブーのようになってしまって吃音のことを話さなくて辛かったこと、1年前田舎に帰るにあたって思い切って親に吃音について悩んでいることを打ち明けたこと、そして少したって実は父親も吃音だったと初めて聞いた衝撃など、それらを話せたことが自分にとって貴重な時間になりました。今まで吃音を話せる場が無かったことも含めて、参加できて良かったと思っています。

町田 直人(スタッフ)

今回私にとって約三年ぶりのつどいであり、千代田小の門をくぐった瞬間に懐かしい思い出がこみ上げてきました。私は以前この場所で、つどいの子供達やご両親の方々を前に演劇をやった経験があります。当時は子供達も参加する演劇ではなくスタッフだけで演じたのですが、その分本格的な演劇で、三か月も前から猛練習をするなど苦労した経験があります。そんなことを思い出しながら感傷に浸っていたところ、「お久しぶりです。以前ここで見ていただいた演劇、とても感動したのを覚えています」とお母さん方から声をかけていただきました。演劇をしてから五年という月日が経ち、スタッフや参加者の方も随分と様変わりしたのに、まだ覚えていてくれる人がいることに感動を覚えると共につどいの温かさを感じる事ができました。

体揺らしはD君とペアを組みました。D君は大人相手に緊張していたのか表情が硬く、体も強張っているようでした。しかし体を揺らししているうちに段々と硬さがとれ、リラックスしていくのが分かりました。D君は終わった後に照れながら、ありがとうございますと言ってくれました。

揺らしで十分にリラックスでき



た後、いよいよ参加者の演劇指導に掛かりました。私は国リハの学生さんと一緒に、N君の担当でした。N君は私が初めて参加した頃はまだ小学生だったのですが、今や立派な高校生に成長していて驚きました。小学生の頃の彼は話し合いの最中でも我慢できずに走り回ってしまうイメージが強かったのですが、現在の彼はとても落ち着いていて「この場面はこんな感じで演じれば良いんじゃないですか」と逆に教えられることもあるくらいでした。N君の成長をととても嬉しく思いました。

話し合いは小学生グループに加わり、D君、H君、R君と話し合いました。小学生グループの経験が少なく、またブランクのある私はあまり発言をせず、終始聞き役に徹していましたが、子供達は沢山発言してくれて、有意義な話し合いにすることができました。積木を使って言語関係図を立体的に表したりと小学生には少々難しかったかと思いますが、みんなしっかりとついてきてくれました。私が最も印象に残ったのは将来の夢について尋ねた時に、スポーツ選手になりたい、言語聴覚士になりたいと夢を語る前に「吃音は大人になっても治らないかもしれないけど・・・」と前置きしていたことです。まだ小学生の内から吃音は治らないことを覚悟していて、その上で自分の将来をイメージできることが素晴らしいと思いました。つどいが目指しているものが少し理解できた気がします。これから五年後、十年後、素敵な青年へと成長した彼らと出会えることが楽しみです。その時も現在のように、彼らを温かく迎えてくれるつどいであって欲しいと心から願っています。

戸高 恵理子(埼玉県久喜市立青葉小卒)

今回の集いはスタッフとして初めて参加しました。行く前はとても緊張していて、どもってしまったらどうしようかと考えてしまいましたが、始まってしまったらそのような事を考えている時間がなく、劇も楽しくできました。午後話し合いも小学生という事で会話ができるのか不安でしたが、絵や気持ちを書いてもらい、今の気持ちを知ることが出来ました。自分が小学生の時どのような気持ちだったかなと思い出しながら考えたりしました。自分だけが悩んでると思っていましたが、色々話を聞き、皆が同じ

気持ちなのだと改めて思いました。

10年振りに牛久保京子先生(恩師)にお会いしてとても懐かしくお話が出来て良かったです。先生とは私が小学四年の時から付き合いで吃音の話だけでなく、他にも話を聞いてもらったり、反発もしたし、言い合いなどをし、先生を困らせたことなどありました。お世話になっていた時は吃音治したいという気持ちでいっぱい先生の話を聞いていない時もありました。

今も治れればいいという気持ちはあります。吃音がある事わイヤだし、受け止めても認めている訳でもないんですが、吃音があったから少しでも人の痛みとか分っていると思うし、介護とか看護の方に行く気になったのかなと思います。普通に話せば出会えなかった人達とも出会えたと思うと悪くないかなと思えるようになりました。吃音がある自分も嫌いでなくなりました。



今となつてお先生との出会いがあったから、言友会の方とも知り合えたし、今の私があると思います。先生と久々に会って、何年也会っていないとお思えないくらいに自然に話す事が出来ました。

牛久保 京子(久喜市立栗橋小ことばの教室教諭)

小学生の時の出会いに始まり、中学生・高校生の時を経て、今またステキなお嬢さんに成長された姿を拝見し、人と人との出会いの不思議や素晴らしいさに心温まる思いがします。

忘れられない情景に、寄り添って毎週通ってくださったお母様やおばあちゃまの姿があります。恵理子さんは覚えていらっしゃるでしょうか。中学生の時にも部活を調整して通ってこられたので、教室に来る頃は夕方になってしまいました。それでも、お母様やおばあちゃまはジャージのままの恵理子さんを車に乗せてよく連れてきてくださいました。「話そうとすると、吃音があるから部活の先輩ににらまれる」等、思春期ということもあつてか悩みは多かった様です。高校受験の際の面接練習をしたのも懐かしい思い出です。

今も担当者としてどれだけの事ができているだろうと思う日々ですが…吃音の状態(特に、他

者から見た時に辛そうか辛そうでないか)がどうであれ、それをどう受け止めるかということはその人の内面での葛藤状態によって違うので、周りの人々はそのありのままの思いに寄り添って向き合っていければいい!…と妙に納得している「ことばの教室」担当者です。ともあれ、こんな風に他人と他人とが出会いつながっていくって素晴らしいなあと思います。吃音があるから出会えた仲間達もいることでしょう。これからも見守っていききたいと思っています。

.....

後記・手前味噌ではありますが、つどいの長所の一つは、ご家族の方に、子供達だけでなく、スタッフがしっかりとどもっているところを、しっかり見ていただけるということ。どもっている人は魅力的ではない…ということが、全くでたらめなビリーフであることを、肌で体で分かっていたためです。

・「お母さん方は背負わされてきたこの十字架を、今ここに置いてください」ということ。我々スタッフが実体験からも、お母さん方に最も伝えたいことの一つ。自らを責める必要は全く無い。(たかはる)